

〔論 文〕

中学校教師における「鑑賞授業」に対するPAC分析

PAC analysis of “an appreciation class” in a junior high school teacher

関 口 洋 美

Sekiguchi Hiromi

問 題

近年、図画・工作、美術および音楽において「鑑賞」の授業は重要な内容の一つとしてとらえられている。平成10年告示・平成14年度から全面実施された学習指導用では、美術でも音楽でも「表現」の内容と比較した場合、「鑑賞」の内容は少ないと感じられた。しかし、平成24年度から中学校で全面実施された新学習指導要領でも明らかに記述が増えており、内容として重視されている。文部科学省による新学習指導要領において、中学校「美術」での目標では、以下の様に記されている。

「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、美術の創造活動の喜びを味わい美術を愛好する心情を育てるとともに、感性を豊かにし、美術の基礎的な能力を伸ばし、美術文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。」

また、各学年における鑑賞分野での目標については、下記の様に記されている。

1年生の目標

- (1) 美術作品などのよさや美しさを感じ取り味わう活動を通して、鑑賞に関する次の事項を指導する。
 - ア 造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫、美と機能性の調和、生活における美術の働きなどを感じ取り、作品などに対する思いや考えを説明し合うなどして、対象の見方や感じ方を広げること。
 - イ 身近な地域や日本及び諸外国の美術の文化遺産などを鑑賞し、そのよさや美しさなどを感じ取り、美術文化に対する関心を高めること。

2・3年生の目標

- (1) 美術作品などのよさや美しさを感じ取り味わう活動を通して、鑑賞に関する次の事項を指導する。
 - ア 造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫、目的や機能と

の調和のとれた洗練された美しさなどを感じ取り見方を深め、作品などに対する自分の価値意識をもって批評し合うなどして、美意識を高め幅広く味わうこと。

イ 美術作品などに取り入れられている自然のよさや、自然や身近な環境の中に見られる造形的な美しさなどを感じ取り、安らぎや自然との共生などの視点から、生活を美しく豊かにする美術の働きについて理解すること。

ウ 日本の美術の概括的な変遷や作品の特質を調べたり、それらの作品を鑑賞したりして、日本の美術や伝統と文化に対する理解と愛情を深めるとともに、諸外国の美術や文化との相違と共通性に気付き、それぞれのよさや美しさなどを味わい、美術を通した国際理解を深め、美術文化の継承と創造への関心を高めること。

美術同様に、中学校「音楽」においても以下のように目標が述べられている。

「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。」

また、各学年における鑑賞分野での目標については、下記の様に記されている。

1 年生の目標

(1) 鑑賞の活動を通して、次の事項を指導する。

ア 音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを感じ取って聴き、言葉で説明するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと。

イ 音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて、鑑賞すること。

ウ 我が国や郷土の伝統音楽及びアジア地域の諸民族の音楽の特徴から音楽の多様性を感じ取り、鑑賞すること。

(2) 鑑賞教材は、我が国や郷土の伝統音楽を含む我が国及び諸外国の様々な音楽のうち、指導のねらいに適切なものを取り扱う。

2・3 年生の目標

(1) 鑑賞の活動を通して、次の事項を指導する。

ア 音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して聴き、根拠をもって批評するなどして、音楽のよさや美しさを味わうこと。

イ 音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて理解して、鑑賞すること。

ウ 我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴から音楽の多様性を理解して、鑑賞すること。

(2) 鑑賞教材は、我が国や郷土の伝統音楽を含む我が国及び諸外国の様々な音楽のうち、指導のねらいに適切なものを取り扱う。

新指導要領における特徴は、美術・音楽ともに、「表現」と比較して「鑑賞」がほぼ同じ程度の比重を持っていると考えられる点である。具体的な内容の特徴としては、美術では自然や環境、音楽では文化や歴史と関連づけながら鑑賞することが示されている。これに関連し、「日本の作品」の鑑賞を取り入れることも含まれている。その他、目標の中では表現や鑑賞の題材を指定しておらず、現場の教員にその選択をゆだねている傾向が強いことがあげられる。

さらに、今回改正・施行されている新学習指導要領全体における改善事項として、「言語活動の充実」があげられる。この改善点は、美術や音楽の「鑑賞」の授業にも及んでおり、鑑賞した感想を言語化することを重視している。

しかし、自身の経験や美術館などでの子どもたちの反応を観察すると、子どもたちにとって鑑賞は簡単なことではない。さらに、それを言語化することは難しい。何かを読み取ったり、感じとったりしていても、その漠然としたものを言葉にして表していくのは容易なことでない。したがって、その指導をする教師も、「鑑賞」の授業に対して何らかの困難さを感じているのではないかと考えられる。まず、題材選びについては、自由度は増したがその分選択幅が広がり、教師側の知識がこれまで以上に必要とされているはずである。また、鑑賞後の言語化を見据えて、子どもたちが言語化しやすい題材を選ぼうとしている教師もいるであろう。もちろん、実際に鑑賞体験を言語で表すための指導にも苦労されていると考えられる。

では、実際に授業を受け持つ教師たちは「鑑賞」の授業にどのような印象を持っているのだろうか。現場で「鑑賞」の授業を行っている教師たちの本音を聞くことは、これからの指導を考えるうえで、必要なことである。そこで本研究では、美術および音楽の教員が、「鑑賞授業」にどのような印象を持っているのかを構造的に明らかにすることを目的とする。構造化されたインタビューや、大量データを得るための質問紙調査ではなく、印象の在り方を探ることから、その構造を明らかにすることで、教師たちが普段何気なく抱えている「鑑賞授業」に対する考えを明らかにする。そのため、本研究では、内藤（2002）によるPAC分析を用いて、中学校美術教諭および中学校音楽教諭に対して調査を行う。

方 法

協力者：千葉県内公立中学校の美術教諭1名（S、40代女性）、音楽教諭1名（U、30代女性）。

調査者：S教諭に対しては、本研究の連携研究者である吉村が調査を行い、U教諭に対しては筆者が調査を行った。なお、2回とも両名は同席している。

調査日：S教諭は2011年12月24日、U教諭は2012年2月4日に実施した。

会 場：それぞれが勤務する中学校の一室を借りた。

手続き：内藤（1997）が開発したPAC分析を実施した。PAC分析は、自由連想、連想語に対する類似度評定、類似度評定をもとにクラスター分析を行った結果（デンドログラ

ム)の解釈に対するインタビューの3つの行程から成り立っている。自由連想では、番号を付した単語帳を配布し、「あなたが“鑑賞授業”と聞いて思い浮かぶものを、単語でも文章でも出来事でも何でもいいので、思いついた順に紙に書いていってください。これ以上でないと思ったら、やめてください。なお、できるだけご自身の授業を意識して思い浮かべてください。」と教示した。

結 果

美術教諭Sの結果

自由連想によって思い起こされた語は15個、連想時間は2分35秒であった。連想された順に、

「美しさ」 「良さ」 「作者の気持ち」 「形」 「色彩」
「技術」 「技法」 「立体」 「平面」 「日本文化」
「西洋文化」 「文章」 「言語活動」 「感情移入」 「難しいと感じる」

デンドログラムは、S教諭との協議の結果、3つのクラスターに分けられた。デンドログラムは図1に示した。

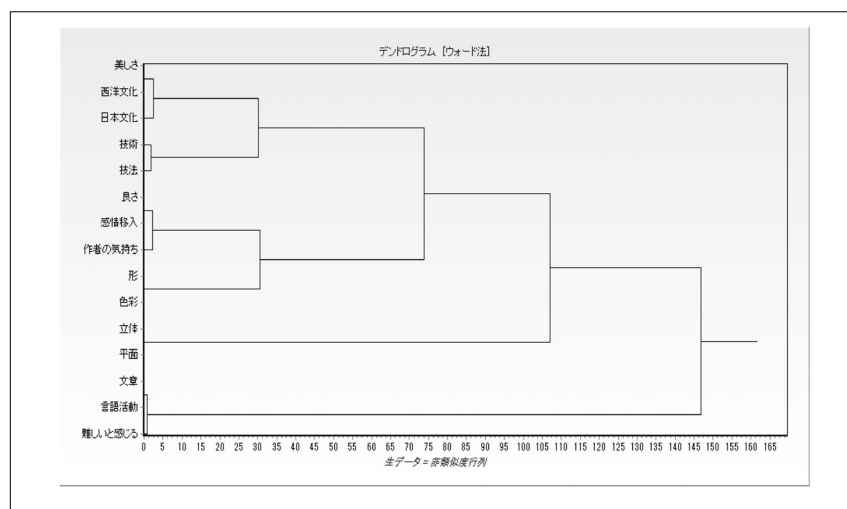


図1：S教諭のクラスター分析の結果

S教諭に各クラスターについてたずねたところ、上段のクラスター①（美しさ 西洋文化 日本文化 技術 技法 良さ 感情移入 作者の気持ち 形 色彩）は「作品から読み取れるもの」、中段の②（立体 平面）は「作品の形態」、下段の③（文章 言語活動 難しいと感じる）は「鑑賞文：自分の思いを言葉にして伝える手段」と語った。

インタビューでは、クラスター①において、西洋文化と日本文化が一緒に入ったことに

関しては違和感を覚えると語っている。また、最後の感想として、「自分では、鑑賞ってこういうものっていうことが曖昧だったなと思います。鑑賞教育について、ほかの先生と話し合うことも多いんですが、どうしても目の前の問題にのみになってしまう。授業時間も削られてますし。しっかり順序立てて考えると、鑑賞教育とは？というのを考えることはなかったかなと思います。」という意見を得た。

音楽教諭Uの結果

自由連想によって思い起こされた語は13個、連想時間は8分30秒であった。連想された順に、

「ヨーロッパ」「歴史」「深く知れば知るほど楽しい」
 「設備を要する」「音源が多い」「できる限り映像をつけたい」
 「ポイントを当てる場所が難しい」
 「最近ではCMやドラマ等で使われているため興味を引きやすい」
 「曲の聴かせ方や発問によって子ども達のとらえ方が変わる」
 「上手に文章表現できない子の評価方法」
 「オーケストラが多いため、実際の楽器を見せて音を聴かせたい」
 「日本芸能・特に民謡への興味の持たせ方が難しい」
 「歌唱・創作との時間配分」

デンドログラムは、U教諭との協議の結果、3つのクラスターに分けられた。デンドログラムは図2に示した。

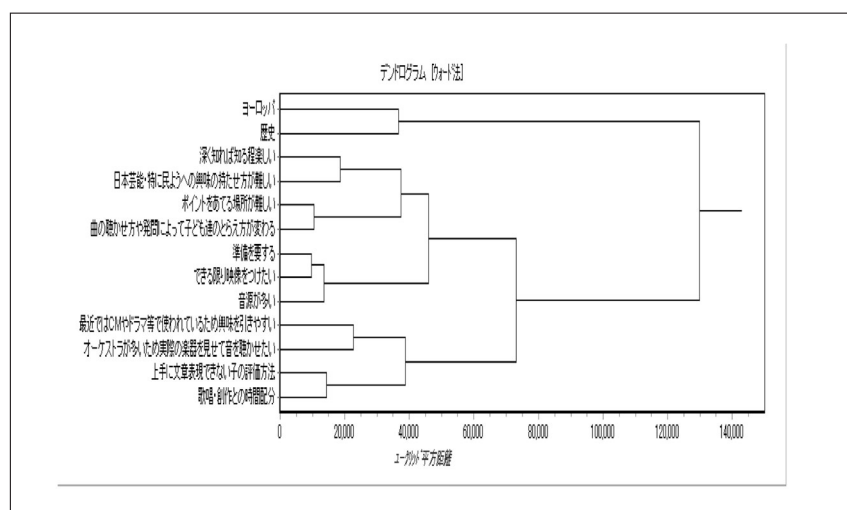


図2：U教諭のクラスター分析の結果

U教諭にクラスターについてたずねたところ、上段のクラスター①（ヨーロッパ 歴史）は「背景」、中段のクラスター②（深く知れば知るほど楽しい 日本歌謡・特に民謡

うへの興味のもとせ方が難しい ポイントをあてる場所が難しい 曲の聴かせ方や発問によって子ども達のとらえ方が変わる 準備を要する できる限り映像をつけたい 音源が多い)は「授業の内容」、下段のクラスター③(最近ではCMやドラマ等で使われているため興味を引きやすい オーケストラが多いため実際の楽器を見せて音を聴かせたい 上手に文章表現できない子の評価方法 歌唱・創作との時間配分)は「導入とまとめ」と語った。

インタビューでは、「この分け方(クラスター)が、ああ、なるほどなあって思ってた。見ました。」と感想を述べていた。また、「自分で鑑賞の授業は嫌いじゃないんです。楽しいので、自分でも曲を聴いて、いろんなこと新たに勉強して、教材研究をしながら面白いなあって思ったことは子ども達も何人かのってきてくれるので、面白くなって思いながらやっています。」と、鑑賞授業への思いを語ってくれた。

考 察

美術・音楽の両教諭に共通していたこととして、まず、「作品の背景情報」に関するクラスターが見出されたことがあげられる。インタビューの内容もふまえて考えると、作品の背景情報はどちらの分野でも必要な知識であり、それを得るために、教員側もかなり勉強が必要であると考えているようであった。次に、美術でも音楽でも鑑賞の対象として、まずは「西洋の作品」があることが感じられた。これは、これまでの鑑賞授業の影響ということもあるが、次に共通点として出てくる「日本の作品の鑑賞は難しいと感じている」という共通点とも関連してくる。指導要領では、日本の作品の鑑賞を目標として示しているが、現場の先生からするとそれは難しいようである。美術では、江戸文化の作品としての浮世絵や屏風絵などは西洋画に比べてより平面的であるため、美しいものとして鑑賞させるのが難しいようである。また、音楽においては、表現において使用される楽器の多くが西洋楽器であり、そのために鑑賞させる作品も西洋作品が中心となるため、あえて日本の作品を鑑賞させるときの目標の立て方などが難しいものと考えられる。最後の共通点として、「鑑賞によって感じたことの言語表現の難しさ」があげられる。やはり、現場で指導する教員たちは、感じたことを言語で表現するのは難しいと感じているようである。ただし、この“難しさ”は2つの意味を持っている。1つは、子どもたちが言語化することを難しいと思っているということであり、もう1つは教師が指導することや評価することが難しいと思っているということである。

今回の中学校美術教諭、中学校音楽教諭のPAC分析の結果を通じて、両教科に共通する「鑑賞」の授業に対する現場教員の印象が明らかとなった。特に、平成24年度より全面実施された新学習指導要領の目標として記されている点について、難しさを感じていることが明確に示された。本研究は、鑑賞授業における言語化をオノマトペの活用によって支援できないかという目的の基礎的研究としてなされたものである。よって、本結果を踏まえて、言語活動を強いられる子どもたちと、その指導を行う現場の教員のために、オノマトペの活用による鑑賞体験の言語化の促進に貢献していきたいと考える。

謝辞

本研究にご協力いただいた、千葉県立遠山中学校美術担当S教諭および千葉県立下総中学校音楽担当U教諭に感謝申し上げます。お忙しい中お時間を割いていただき、また貴重なデータの収集にご協力いただきありがとうございました。

※本研究は、平成23年度科学研究費助成事業・学術研究助成基金助成金（基盤研究(C)）（課題番号23520201）として行われているものである。

引用文献

土田義郎 「PAC分析支援ツール」 wwwr.kanazawa-it.ac.jp/~tsuchida/lecture/pac-assist.htm

内藤哲雄 2002 PAC分析実施入門[改訂版]—「個」を科学する新技法への招待— ナカニシヤ出版

文部科学省 中学校学習指導要領 「音楽」 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/on.htm

文部科学省 中学校学習指導要領 「美術」 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/bi.htm

付録1

PAC分析 美術教諭に対するインタビュー 2011年12月24日

(S教諭の発言：s インタビュアーの発言：Y)

Y それでは、いきなり最初からたくさん含まれるんですが、美しさから色彩までの10個が1つのまとまりとして、ご自身の中で関連のある塊として出てきたんですけれども、自分ではどういうまとまりだと、たとえば、これに表題をつけるとしたらどんなタイトルがつけられるかということで、どうでしょう？

S 作品から読み取れるもの、だと思います。

Y こういう感じですね。

S はい

Y つらつらと眺めて、このグループ外れ、計算上は一緒になったけれども、自分に中で、異質だと、仲間はずれみたいなのは感じませんか？だいたいきれいにおさまってますか？

S そうですね。だいたい、はい。ただ、西洋文化と日本文化だけ異質になるんだと思うんです。で、何でかという、これは西洋文化だよってしまってから、この作品から読み取れるものは何かっていうので、こおいったものが出てくるので。それを考えると、ちょっとだけ（異質）。何も言わずにここから読み取れるものは何かっていったときに、作品だけ見せると、あ、日本的だって言葉が出てきたりとか、ヨーロッパで作れたものだってことが出てきたりとかすると思うんで、入ってきていると思うんですよ。

Y 次元が違うように感じる？でもご自身では評定するときに、近いとか関連するという比較的にしていると点をつけられていると、この2つ（西洋文化と日本文化）も似ているように団子状態に評定したようですが、今の話だとこの2つ（西洋文化と日本文化）はちょっと次元が違うように感じている部分もあるので、どうして（このグループを）一緒にしたのでしょいか？

S 画面で西洋文化の良さとかを見たときに、西洋文化の良さっていったい何だろうねって授業なんかではいってしまうんですよね。そうすると、西洋文化の良さもあるし、日本文化の良さも、子どもたちには知ってほしいというのはあるので、それはセットで考えというか、近いものとして捉えるっていうように私の方で見ちゃったんだと思います。

Y この2つ以外は、西洋技法の美しさとか、良さとか、作者の気持ちってことで、こういう風なことのほかの事柄っていう？

S 付随するものって感じですね。これ（西洋文化と日本文化）に対しての美しさとか技法、技術とか良さとか。

Y 文化っていうのが、一段、美術以前のところにあって、で、その文化っていうくくりで、あって、それが美しさとか良さとか形とか色彩とかっていうところきたところで、美術の作品のところに降りてくるっていう感じですか？

S たとえば、写楽って世界でも非常に認められているさかですよ？もし、彼が日本じゃなくて外国の技法を習った上だったとしたら、どんなものを描くのかな？と。やっ

ぱり写楽っていう画家っていうのは、の本文かがってからの、日本文化っていう土台の上で彼がいることで彼が成り立っているのかなって思うんですね。やっぱりベースになるのは、その土地、その描く土地とかで、培われた文化がベースになっていると思うんですね。

Y そういうことだと、今回のテーマである「鑑賞教育」っていうのでは、大きな部分として表に現れた形とか色彩の背景にある文化っていうのを味わってもらおうとか、伝えたいということが教師としては強いということですかね？

S そうですね、日本人特有のものってあると思うんですけども、日本文化のことについて、日本文化特有の良さとか美しさとか、特徴とか、そういうものがとてもすばらしいんだっていうことが、まだしっかり自分の中でできていないので、外国のものはすごいってすぐに飛びついてしまうんだと思うんですね。でも、本当は自分達も持っている日本文化の良さっていうものをしっかりわかったうえで、海外のものを評価するっていうのが本来なんじゃないかなって思うんです。でも、そこが出来ていないので、どうしても西洋の作品の日本の作品って、私としては、どちらもいいと思うんですね、同じくらい。でも子ども達を見ているとどうしても背用文化に惹かれてしまう。それは、私も幼い頃、ものすごく幼い時には、立体感のある西洋文化ってすごいっていう意識があったんですね。でもそれが、それは家庭環境っていうのもあったんだと思うんですけども、母は歌舞伎がすきでしたし、父も、母も父も絵画にとっても興味があって、いろいろ見せてもらったり、話をしてもらったりってなかで、だんだん日本文化の良さとか素晴らしさってことに気づいてきたときに、私は日本文化の良さって良さって、中学校の後半から大学に入るまでもものすごく興味が出てきて、すごい好きになったんですけど。それを見た上で西洋文化を見たときに、あ、日本文化もいいんだけど、日本文化にないところが西洋文化にあるってことを気づいたっていうか。そういうことがあるので、それを子供たちにも知ってもらいたいなあと思うんですね。

Y そのとき、日本文化、特に西洋文化と・・・もそうなんですけど日本文化としてイメージされているのは、時代的には現代も含めてということなのか、それとももう少しちょっと古い、いわゆる古典という時代のことをイメージしてということではどうなんでしょうか？

Y 中学校での美術の鑑賞の時間に日本の文化というのをベースにっていうか、意識しているというのは、どの先生もというよりも、ご自身の特徴というように捉えているんですか？

S 私が教師になりたての頃、今から15、6年になりますけれども、私はその頃、日本文化に興味があったので、子ども達の教えたいと思ったんですね。その頃は、日本文化の鑑賞をするっていう人があまりいなかったんですね。なので、私はそのときの気持ちを今でも継続しているという感じはあるんですけども、最近、指導要領ですよ、何回も改訂されて、その中を見ると、かなり日本文化については生徒達に指導しなさいということは出てきています。だから、今から知り合った先生に、私の授業をもしみてもらったとすると、やはり指導要領を見て、日本文化に力を入れているのかなと思う方は多いと思います。

- Y わかりました。そうすると、この10個の中に、「感情移入」と「作者の気持ち」この2つはものすごく近いと思うんですよね、近く出てますし、ほかの8個とも結構近い、特に「形」「色彩」というのと近いという、このあたりはご自身ではどのように理解されてますか？
- S さきほど、というのがベースにあって、その上で作品を作っていくという話をさせてもらったんですが、形とか色とか、作品のですね、形とか色とか技法とかそういったものから、作者の意図とかが読み取れると思うんです。で、色ってものすごくその色の持つパワーとか、色の持つ意味ってものすごくあるってあるんですけども、その無意識のうちに使っている色っていうのは、その作者の感情だと思うんですよね。なので、その形とか色とかそういったものも作者のきもちにすごく近いものがあるって考えて、感情移入とか作者の考えに近いって答えたんですよね。
- Y なるほど、そうすると、鑑賞ということになると、今おっしゃった作者の気持ちとかっていうのを自分の感情移入しながら、捉えていくというか共感していくということは鑑賞とはすくなくじむと思うんですけども、形とか色、ないしは技術などというのも、鑑賞の対象として出てきているわけですよね？
- S はい。
- Y わかりました。それでは、次はかなり今のグループとは距離のあるところで、「立体」と「平面」がポコッと2つグループになっているんですけども、この2つはどういうまとまりですか？
- S 作品の形態。
- Y としてまとめると、具体的には、立体と平面というのは、まさに美術の対象としては絵画ち彫刻ですよね？それらを2つ並べられたというのは、いわばこの世界の常識として並べられた、そんな感じですか？
- S そうですね。私、終わってこれを見たときに、どうして動画を入れなかったのかなとおもったんですけども、最近、アニメーションとか、そういう映像作品というのはどんどん入ってきてますし、あと光って言うのもあるので、そういったものも、全部ひっくるめての作品の形態ってことですね。
- Y 平面というのは、その先の動画とっていうのは、広い意味の平面にはならないんですか？そのやっぱり完全に、美術教育というか、鑑賞教育の中では分けて？
- S そうですね、鑑賞教育のなかでは、平面とか立体とかっていう言葉はほとんど出てこないですね。だからこれは、もう私のほうでの認識って言うか、考え方ですね。
- Y その作品の形態としてですね？だから、作品の形態ってタイトルをつければ、それ以外の動画とかっていうのも思い浮かんでくるということなんですね。
- S はい、そうですね。まあ、もっと動画なんかもほんとに広く、平たく、広く考えれば、平面に入と思うんですけど、最近、3Dなんかもでてきてるんで、やっぱりそれ、映像っていうものは、それを考えると、平面や立体とは異なる部類に入る、これから入ってくるんじゃないのかなっていうふうに思います。
- Y あとその平面と立体では、鑑賞教育っていうことをテーマにしたときに、教育に使う利用の仕方に違いがあるみたいなことがあるんですか？それとも、形態は違うけれども

同じ対等にといいますか、同じように美術鑑賞の対象になるというような、むしろ同列というような感じになるのか、それとも先ほど私が言いましたように、むしろちょっと違う見方が必要だとか、違う鑑賞のさせ方が必要とか。

S 基本的なところは平面も立体も、やっぱり、平面であろうが立体であろうがそこには、作者の考えとかそういったものが全部入っているわけですから、やり方としては同じだと思います。ただ、その見せ方っていうのはちょっと変わってくるかなって思うんですよね。平面は、そのうーんと、資料集ですとか、インターネットからとったものを拡大してあるですとかそういうもので代用できるんですけども、立体っていうのはやっぱり触ってみたりとか、前だけではなくて、側面もそれから背面も、それから上からもっていう、様々な、360度みなければ、やっぱりその、本当の意味での作者の気持ちとか、形とか、色とか、そういったものはちょっとわからないんじゃないのかなと思うので、見方はちょっと変わってくると思います。

Y だから、対象を理解するために、前からだけ見てはいけないという、おっしゃり方だったんだけど、あの、むしろそうじゃなくて、ただ前からみただけじゃなくて、いろいろな角度からいろんな見方ができるっていう意味では、立体の方が豊かであるという思いもお持ちなんですか？それはどうなんですか？

S そうですね。うーんと。本来だったら、本物を見るっていうのが1番いいと思うので、うーんと、すばらしさって考えると、平面も立体も同じだと思うんです。なので、その見方の豊かさっていうふうに考えると、360度見るっていうことから、考えるとまあ、立体って、すごくその、子ども達にとってたぶん、ぺったんこな作品よりも、様々な方向からみられるものの方が、そのすごく見た感じっていうのは出てくると思うんですけれども、まあ、現実的なことを考えると、まあ、立体作品をじっくり鑑賞するっていうのはかなり難しいですね。

Y 難しいんですか？むしろ、こうなんていうか、退屈しないでいろいろな見方ができるから、間が持つというふうなそんな感じではなくって？

S うーん、間が持つとかそういうのを考えると、立体っておもしろいんですけども、たとえば、ミケランジェロが作ったダビデ像を見せたいとか、ピエタを見せたいとかっていても、まあその、レプリカの石膏像を借りてくるっていうのもどこにあるのかまず調べないといけないですし、ま、借りてこられる可能性っていうのはほぼゼロに近い状態ですよ。じゃあ、学校で用意できるのか、学校で購入できるのかっていても、やっぱりそれはちょっと難しい問題なので、そういうのを考えると、結構立体って難しいんですよ。鑑賞としてやるのには。ただ、その、うーんと、場所によっては、そのすんでいる地域の中にある立体作品を取り上げて鑑賞するっていう方法を探れるところもあるので、それはまた変わってくる。まあ、この、成田市でしかもこの遠山中でやるってことになる結構難しいって思います。ただ、そのとかく鑑賞っていうと、あの、今までその、有名な画家ですとか、彫刻家ですとか、芸術家達が作ったものから、こうなにか読み取るっていうのがすごく主流にはなっていたんですが、これから先のことを考えると、もっともっと身近なものの中で鑑賞授業っていうものを作っていかなければならないかなっていうのもあると思うんですよね。それを考えると、たとえば、そ

の、この建物自体も鑑賞の1つにはなるかなと思うんです。たとえば、デザインっていうことで考えると、で、そこにはやっぱり、使い易さだったりとか、その地域に根付いたものにしていくためにどんな学校にするのかっていうのを考えて、建築家がデザインした建物であるっていうふうな大きな捉え方をすると、まあ、それも鑑賞になっていくのかなあと思うんで。まあ、そういった形で立体作品っていうふうに捉えていくとできなくはないのかなあと思うんですが。まあ、なかなか時間をとるっていうのが難しくなってしまうと思うんで、そこまでなかなかやることができないんですけどね。

Y ジャあ、先ほどの、たとえば、先のダビデ像のように本来は立体のものを、実際は写真というか、平面で鑑賞させるとすると、それしかできないと、そういう鑑賞させ方については何かご意見というか、お考えはありますか？

S うーんと、立体のものを平面に置き換えて、まあ、写真で見るとなると、やっぱり受ける、なんていうんですかね、そのときの、本物を見たときの感動と、こういうものがあるよって資料としてみせられたときの感動って、全然違うと思うんですよね。で、それを考えると、その、いかにしてすごいものなのかっていうことを、子ども達に、伝えるかっていうことになると思うんです。それを考えると、伝えきれないなかで、子ども達に鑑賞文を賭っていうのは大変、まあ、自分としては、申し訳ないなあという気持ちでいっぱいなんですよね。ただ、その、じゃあ、何も見せないでその、彫刻とか彫塑というような立体作品を3年間見せないで、鑑賞授業を行った方がいいんじゃないかっていうと、まあそれは別物というか違うと思うんです。知識っていうのも、すごく大切だと思うんですよね。あのときに勉強したものがこれだったのかって、思う感動と、何にも知識がないまま見たときの感動ってやっぱりちょっと違うと思うんで、まあ、本物は見せられなくてもでも、写真なりなんなりいろんなところからとったものっていうのが資料としてはあるので、まあ、そういったものを駆使しながら、本物は見せられないけれども、本物っていうのはこんなものだよっていう、その少しでも本物に迫れるような鑑賞っていうのが大事かなと思います。

Y まあ、たぶん語っていったらまだまだ出てくるんでしょうけれども、3番目の、これは本当に今までのグループとは仲間はずれが早く起こっているんですけれども、「文章」、「言語活動」、「難しいと感じる」はまとまっているんですよね？この3つについてはどういうまとまりですか？

S これはもう、本当にあの、鑑賞文という、自分の思いを言葉として伝える手段かなって思うんです。

Y うん。鑑賞文に関しての、事柄としてまとまっているということですか。それは、生徒さんがそれを表現するときのことということですか？

S はい。もちろん、それを発表させてっていうのもあるんですけど、発表させると、どうしても前の人のを聞いて、「あ、あれもらい」っていうふうにして話すっていう生徒もいるので、どうしても純粹にその子達がどんなふうに感じているのかっていうのを知るためには、文章として書いてもらったものをこちらで採点するって形になっちゃうんですよね。で、もう、あの、文科省のほうからは言語活動、どの教科においても言語活動を入れていけるようにっていうように、あの、おりてきているので、まあ、美術の分野

もやっぱり言語活動を入れる。で、ここには実は賛否両論あって、本当は少し気持ちが動いていて、こうニュアンスとしては、こう、あるんだけど、それを国語の力がないばかりにこう、なかなかこう、うまく相手に伝えられないとか、テイストなんかのと気にはそうしても文章を書くのに時間がかかってしまうために、本当はいいことを考えているのに、何もかけずに終わってしまって、評価がCになってしまったりっていう生徒が実際にいます。で、それを考えると、何となくそこに、言語活動をはいっても美術の中でその鑑賞の中で、確かに言語活動は大事だけれども、それだけで評価していいのになっていうようななんか矛盾っていうか、そういうものが出てきていて、いやそうじゃないっていう先生もいれば、でも、相手に伝えるっていうことが大事なわけだから、やっぱりそこは割り切ってきちっと文章になってない子と、なってる、あ、文章にできない子と文章にできる子は分けて、評価しなければならんんじゃないかっていう先生とかいろいろいます。で、私としては、今のところ、その、いろいろなところから、みてます。だから文章をあの、見るっていうのはまあ、もちろんなんですけれども、それプラス、たとえば、何ですけれども、こう、私がこういう作品だよっていうふうに解説をしているときに、どのくらい「ああ」っていううなずきがあるとか、それから、ただ、そのうなずかなくても、心の中でなんかちょっと「ああ、なるほどね」って思っている子もいるわけですね。じゃあ、そういう子はどんなふうに、評価していくのかっていうと、メモを書かせて、そこに、それを1人1人チェックして行って、プラス1点していくとか、そういうところで少しずつ、その、言語活動以外のところでのジェスチャーとか、メモとかそういうところでも評価して行くにはしてるんですけども、なかなかこう、自分が納得のいくような評価ではないかなっていうふうに思っています。

Y 今の話を聞いていたらですね、その、あてて、口頭で生徒に感想といいますか、答えさせる発表させるっていう、これも言語活動ですよね？けれども、文字に書かすという別の言語活動、この2つの間には少し距離をおいておられるわけですね？あの、最初の方の発表でいけばまずい点をいうのは、前の子のまねをするというか、それをつかって、なんていうか、その範囲でしかかんがえようとしなくなるというか、そんな感じがするということ？それが文章で1人1人を書かせると自分のものが出てくるという意味では、いいけれども、その場合には表現力があって、うまく表現できない子達もいると、で、その子達が、個性的なというか、自分なりの鑑賞ができていないかという、それはまた違うんだというそういう思いを持っておられるということですね。で、この「難しい感じる」というのは、どなたが感じるということですか？

S 生徒が感じている。

Y 生徒が感じている。生徒が、鑑賞文を書かされるのは難しいと感じているという、そういう受け止め方をしているということですか。

S そうですね。私はここに来て1年目なんですけれども。前にいた子たちは、その、訓練的になっていったんですね。1年生から始まって、もう3年間びっちり鑑賞文を書く。で、鑑賞文、こんな風な表現をすると、まあ、相手に伝わるんじゃないかっていうのを今、いろんな見本を見せたり、こういうのをかけばいいんだっていう話をしたり

とかっていうのを3年間繰り返していくと、3年生になったときには、鑑賞文がすごく、鑑賞が好きっていうのがすごく増えたんですよね。それはどうしてかなって考えると、1年生のときには、最初鑑賞っていうのをやると、その、まあ、何を言っても怒られないっていうか、正解はないんですよね。感じたことをいえばいいだけ何で、なので、すごく楽しいってことになるわけですよ。ところが、いったんがくとさがっちゃうんですよね。ただ意見を言うだけでなく、そこには根拠がなければならぬんだって話をし始めていくと、一回、「ああ、難しい」って感じる訳ですよ。ところが、今度、それをこえると、その苦しいっていうか、難しいなあって感じて落ち込むんだけど、またあがっていく。それは何でかっていうと、いろんな作品を見て、こういった技法が使われているから、自分はこう思うっていうふうに、こう鑑賞文なり、発表なりすると、評価してもらえっていうのもあるし、自分が考えたことを自由にかける、で、いろんな作品を見ることができる、自分は今まで表現することは不得意だったけれども、その見ることに限っては、自分はだんだん上手になってきてるっていう実感があるみたいなんですよ。そうすると、だんだんまた3年生くらいになると、かんしょうがとってもおもしろいって感じる子が増えていったんですよね。で、今（学校）の子ども達は、3年生は、一部楽しいっていうふうに言ってます。それはやっぱり自由に言葉にして表現することができて、それが評価となってかえってくるからですよ。1年生もやっぱり、みても1学期はとっても楽しかった。まあ、ピカソを見たんですけども、ピカソってすごく変な絵を描くけれども、実はいろんな時代があったんだってのがわかって、知識としてはいってくるので、知らないことがしれておもしろい。でも2年生になると、今度難しいってなるわけですよ。で、今までは、ただたとえば知識だけを覚えて、覚えたものをテストで書けば、○だったのが、今度は違うことが、鑑賞文というのがどんどん大きく20点くらい鑑賞文にはつけるので、そうすると、ただ、いいことだけをかいただけでは点数はもらえないというので、今、ちょっと難しいって言う時期になってます。

Y それは、ここの学校1年目だから、前任校のことをほぼ頭にいれて、言われたわけですよ？

S はい。

Y で、そのときに、自然にそういうふうに、1年生から3年生まで変わってくるのか、それとも、1年生のときにあるパターンみたいなものをこう、言葉で表現するようなことのトレーニングがあって、で、それが、2年生ぐらいになったら、飽き足らなくなるあるいは、それだけではだめだよっていう、ことになって、自分で考えなければいけないってことになって難しさ、こう壁に当たるというか、それをさらにこう意識して、その先のこと、上のことっていう努力をして、3年生になったら再び自分なりのもの見方とか考え方なり、いわばそういう、成長しいっているというか、そういうふうに捉えていращやるんでしょうか？

S はい。

Y そういうことですか。それはすばらしいことですよ。

S はい。まあ、前の学校の時には、ちょっとうまくいったのかなっていうふうに思って

います。1年生の時、小学校の時にも、鑑賞っていうのをやったっていう子と、どんなことをやったのかも覚えていないことばらばらなんですけども。なんか、子ども達の中では、たとえば、ぱっと絵を見たときに、気落ち悪いなあこれって思っても、教科書とか参考書に載っているものだから、いいって言わなきゃいけないっていう固定概念みたいなものがあるんですよね。でも、人間ってそれぞれその持っている価値観って異なってくるので、絵を見た瞬間に、「わ。気持ち悪い」って思っても、それはそれで、鑑賞だと思いうんですよ。ただ、気持ち悪いんだけど、なんでその作品が評価している（されている）のかって言うのを知っているのが大事なと思うんですよね。妹は・・・。

Y 麗子像。

S ああ、麗子像も嫌いでしょ。嫌いでしょ？わたしあれ嫌い。気持ち悪いでしょ。でもあの作者、ものすごい好きなんだよね。あの娘を大好きで大好きで仕方がなくて、一生懸命描いて。だから、なんか筆の乗せ語っていうか、絵の具の塗り方がごつてりしちゃってるんですよ。でも、そこにああ、この人はこんなに好きなんだなあっていうのはわかる。でも、私は好きではない。で、そういうのでいいと思うんですよね。で、印象派も嫌いって人もいるし、やっぱり好きって人もいるんですよね。で、私はスーランが苦手なんですよね。虫がいっぱいたかっているように見えちゃって、すごい遠くに離してみると、あ、確かに、で、あの人の考えってものすごくって、青と赤を組み合わせ、点で置いておいて、遠くから見ると紫に見えるように、うまく調整をしながら描いてるんですよね。その考え方を聞くと、わあものすごいんだこの人ってことはわかるけれども、でも近くによると虫がたかっているみたいで気持ちが悪いってかんじてしまう。で、まあ、人それぞれなので、それでもいいんじゃないのかなって思うんですよね。

Y 先ほど、1年生の鑑賞教育でピカソを使ったって、やっぱり鑑賞教育の対象作品は、ちょっと変わったというか、首をかしげたいくなるような、そういった作品を使った方がやりやすいんですか？どうなんですか。

S なぜ、ピカソがいいかという、ピカソは、幼いときからずーっと写実的な絵を描かされ続けてきたんですよね。で、それまでは、ピカソが登場してきて、その、印象派っていうのが、出てきて、それがすばらしいと認められるまでは、写実性をずっと追求させられてきたんですよね。ところがだんだん時代が変わってくると、絵の価値っていうのも、その絵のすばらしさの価値っていうのもそれがどんどん変化してくるわけですよ。それが、ピカソの作品を見ると、1番よくわかるんですよね。もう、写実性だけではだめだ、そこに何か自分の思いとか、写真とは違うその何か、絵の中に価値を入れなければいけないんじゃないかっていうのがあって、彼がキュビズムを作ったりとか、それから、だんだんこう、彼は写実からどんどんどんどん離れて行くじゃないですか。で、最終的には、子どもの絵が1番すばらしいと思うわけですよ。それはなんでかという、自分がこういうふうに描きたいっていう、無心で描くっていうか、そういったところにすごく惹かれたみたいなんですよね。そういう変遷を見せていくと、子どもたちって、あんなにグチャグチャでよくわからないで、よく子どもって、「おまえの絵、

ピカソみたいだな」っていつてるけれども、その下手って意味のピカソの絵みたいだなんていう考えなんですよ、でも、本当はその裏には、もっといろんな条件とか、彼なりの考えとか、そういったものがいろいろあった上でのあの作品なんで、そういったものを理解させていくとか、あとは取っつきやすいついていうのもありますよね。ピカソって1番有名な画家なんで。子ども達の頭の中で知っている画家であり、しかも、自分たちが持っている固定概念を崩せるっていうのを考えて、やっぱりピカソっていうのが1番。

Y 今、鑑賞群という話をしているんですけども、キーワードとして、固定観念を崩せるっていうことは、いってみれば、その文章にする、言葉にして表現する材料が豊であるというそういう意味もあるんですか？

S ああ、そうですね。

Y そうすると、ふつうで当たり前で、美しいと一言で終わってしまう作品は、やっぱり対象作品としては学校の授業では使いにくいっていうことですか？

S うーんと、1年生の時はピカソをよく使いますけど、2年生、3年生になってくると、3年生ではルネッサンスの時期の作品を教えたりするので、使いづらいかという、そうではないかなと。その、教育というか教師側がこの子達に何を伝えて、何を教えるかによって、選ぶ作品って全く変わってくるので。一概にはそうは言えないかなと思います。

Y さ、そうしたら、いま、それぞれのグループのまとまりについて聞いたんですけども、最後に簡単に、グループ間の違いみたいなものをですね。最初大きくはこの2つに分かれたと、で、このグループと最後の3つの鑑賞文と名づけたこのグループと、かなり早い時期から分かれています。同じ鑑賞教育について事柄なんですけれども、これとこれの大きな違いというのは？

S 上の方は、心の中のものですよ。心の中で動いているっていうか、そういうものだけれども、鑑賞文って外に出すものですよ、内と外って考えるところからカパッと分かれるかなと。

Y そうですね。そういうことからいうと上から12個までの中にはあまり表現のことは出てきてないですね。むしろ受けとめるときの問題だと。で、下の3つは、表現するとすれば、文章で表現せざるを得ないと、鑑賞というのは。

S はい。

Y 受けとめる側と表現する側と、で、表現する側はすなわち文章力というか言語活動というか、そういうことになると思います。そうしたら、この上の2つというのは、途中まではまとまっていたんですけども、途中から分かれたんですが、この2つ、「作品から読み取るもの」というのと「作品の形態」との違った面であるということの、ご自身の中でこの2つを分けるものは？

S うんと、たとえば、作品の形態があって、そこから、なんていったらいいのかな、ここから上（美しさ 西洋文化 日本文化 技術 技法 良さ 感情移入 作者の気持ち 形 色彩）は、たぶん作者の気持ちっていうのに全部集約されるかなって思うんです。色も色彩も良さも。これは（立体や平面）、作者の気持ちを表現するための媒体ってい

うものかなって感じます。

Y なかなか難しいことをおっしゃっているのですが、たとえば技法っていうのはその媒体ではないんですか？

S うーん、そう言われると。たぶんですけども、確かに媒体の1つではあるんですけども、作者が表現しようとする、たとえばいろんな技法がありますよね。で、その技法を使うことが、その作者が表現したいっていう、作者の気持ちを表現しているっていうか、そこちょっと難しいんですけど。

Y まあ、筋が通ってなくても、ご自身のなかで何かあればいいんですけど。

S いいですか。うーん、たとえば、ゴッホ。ゴッホは、技法が変わった人で、最初は写実性に富んだ作品を作ってたんです。でも、これは自分を表現していることにならないうってことで、技法を変えていったんですよね、どんどん。で、そういうのを見ると、作者の気持ちを表すための。あ、表しているもの。だから、その技法を見て、作者がどんな状態でいたのか、どんな精神状態でいたのかとか、どんな気持ちを表現しようとしていたのかを技法で感じ取ることもできるわけですよね。で、そういうのがあるので、こことここはちょっと離れてる。すみません。

Y いいえ。僕はわからないんですけども、ぼくはこの表向きだけ見ていると立体か平面かっていうのは、まさに作品の形態の2分法というか、そういう次元の大きなことと、こちらはもう作品の中に込められた、むしろ細々としたことというか、そこらへんでちょっと違う次元として捉えられたのかなと思ったんですが、今の説明を聞くと、そうでもないみたいなんですよ。よく僕には理解できなかったんですけども。

S すみません。

Y どうでしょう、それでどうにかかりますでしょうか？

Y 最後に付け加えたいことはありますか？今回、こういうPAC分析をしてみて、この体験をされて、新たな発見はありますか？

S 自分では、鑑賞ってこういうものっていうことが曖昧だったなと思います。鑑賞教育について、ほかの先生と話し合うことも多いんですが、どうしても目の前の問題にのみになってしまう。授業時間も削られてますし。しっかり順序立てて考えると、鑑賞教育とは？というのを考えることはなかったかなと思います。

Y こうして、図で見せられても、自分自身でも意外だったということですか？

S 意外性もあったけれども、まとまりの意味を考えると、今までこんなこと考えてなかったなと。

付録2

PAC分析 音楽教諭に対するインタビュー 2012年2月4日

(U教諭の発言：u、インタビュアーの発言：s)

s よろしくお願ひいたします。

u よろしくお願ひします。

s 今、このような結果に出てきたんですけれども、まず、どういうグルーピングで見えていくかを一緒に決めていきたいと思います。見方なんですけれども、まず、ここで分けたとすると(2クラスター)このヨーロッパ、歴史というグループと、そのほかの11個ですかね、大きいグループと見るができるんですね。それで、次の別れ方(3クラスター)でいきますと、ここは相変わらず1つのグループで、深く知れば知るほど楽しい 日本芸能・特に民ようへの興味のもたせ方が難しい ポイントをあてる場所が難しい 曲の聴かせ方や発問によって子ども達のとらえ方が変わる 準備を要する できる限り映像をつけたい 音源が多いまでのグループと、その他の4つというグループになってくると思うんですね。だいたいこのあたりで、その下のグルーピングにすると、だいぶ細かく、ここで分けるんだったら(4クラスターの基準)、ここまで(5クラスターの基準)行かないと言うことになるので、こことここで大きく分けるか(2クラスター)、ここでわけて3つのグループにするかっていうのが、1番どうかなと思うんですけれども、先生まずご自身でご覧になってみて、どういうグルーピングにするか、こことここで分けた方が先生の中でイメージしやすいか、こことこことこの3つの方がイメージしやすいか、ちょっと内容を見ていただいて、どうかなと言うのを・・・、はい。

u 3つの方が。

s 3つの方がよろしいですか？それでは、3つですね、上の2つ(ヨーロッパ 歴史)と、真ん中(深く知れば知るほど楽しい 日本芸能・特に民ようへの興味のもたせ方が難しい ポイントをあてる場所が難しい 曲の聴かせ方にや発問によって子ども達のとらえ方が変わる 準備を要する できる限り映像をつけたい 音源が多い)と、ここ(最近ではCMやドラマ等で使われているため興味を引きやすい オーケストラが多い ため実際の楽器を見せて音を聴かせたい 上手に文章表現できない子の評価方法 歌唱・創作との時間配分)ということで、お願ひします。それでは、この3つと言うことでお話を伺っていききたいと思います。まずですね、ヨーロッパ、歴史のグループ、これを第1グループとすると、ここはどんなグループですかね？このグループに名前をつけるとしたらというんですかね。

u 名前をつけるとしたら。なんだろうなあ、背景とか。

s 背景、はい。ヨーロッパとか歴史とかと言うことですね。ちょっと書かせてくださいね。それじゃあですね、次なんですけれども、こちらの7つのグループですね、このグループはどんなグループですかね？

u これはなんだろうなあ。内容かな。

s 内容？えーと、音楽の内容ってことですかね？

u えーと授業の内容。

- s 授業の内容ってことですね。
- u はい。
- s 第2グループは授業の内容。ではこの第3グループですね、最近ではCMやドラマ等で使われているため興味を引きやすい オーケストラが多いため実際の楽器を見せて音を聴かせたい 上手に文章表現できない子の評価方法 歌唱・創作との時間配分このグループはどんなグループですかね。
- u 導入とまとめ。
- s 導入とまとめ。そうしますと、こちらのうえ（最近ではCMやドラマ等で使われているため興味を引きやすい オーケストラが多いため実際の楽器を見せて音を聴かせたい）のほうが入導、こちらの（上手に文章表現できない子の評価方法 歌唱・創作との時間配分）ほうが入導ってことですかね。
- u はい。
- s ちょっとここメモさせてください。それでは、それぞれのグループとの関係とかを伺っていかうかと思うんですけども。たとえばこの真ん中のところですね、「授業の内容」ということになってますけれども、この2つめのグループと3つめのグループは早い段階で1つのグループにまとまりますので、似てるところがあるということだと思ひうんですけども、共通点はどうなところでしょうかね？
- u たぶん、1つの授業の中のことなんだと思います。
- s じゃあ、そうすると、導入、中身、まとめということですかね？
- u はい、そういうことだと。自分で見て。
- s ここは授業つながりと言うことですかね。はい。それでは、ここの「授業」と「背景」というのはどんな関係に？
- u えーと、おまけ？ じゃないけど、たぶんこれ（授業）をやるのが精一杯で、もし、もしつなげられるなら、こういうこと（背景）も話せればより、楽しく深くなるんだらうなと思うんですけど、とか、だいたいこの子達が聴く曲は、ヨーロッパの曲か、歴史がある曲。なので、自分がわかっていたい内容、授業をするに当たって自分がわかっていたいこと。
- s じゃあ、たとえば、授業とこちらの第2グループ第3グループみたいなところは、先生が実際授業でやっつけてらっしゃることで、この「背景」というのはその前に先生の中の下地としてということですかね？
- u あ、そうです。
- s 下準備として言うような感じですかね。授業に必要なことと言うか、授業のための下準備としてってことですかね。あー、では逆にですね、違いを聞いていかうかなと思うんですけども、たとえば、この「授業の内容」っていう部分と、「導入とまとめ」って言う部分は分かれたよね？ その辺で特に、出していた語の中身とかを見ながら、先生がどうして分かれたのかなあとか、思われる点とかありますか？
- u たぶん、内容については、実際に聴かせなきゃいけないとか、聴いてもらわなきゃいけない感じてもらわなきゃいけないことで、そこにたどり着くまでに、とおひあえず子ども達の興味を引いとかなきゃいけないので、基本、鑑賞ってなかなかこう、興味を引

くのがすごく難しいので。

s はい。

u 実際聴いてほしいところを、が、ここで、で、それを感じて、聴いて感じてほしいためのCMとか、はい、実際の楽器とか、ということです。

s じゃあ、どちらの方（第2クラスター「授業の内容」と第3クラスター「導入とまとめ」）が重要と聞かれたら、どちらが重要ですか？やっぱり内容ですか？

u うん、内容かな。本当はたぶん内容なんですけれども、でも、やっぱり学校で評価をつけなきゃいけないって思うと、内容とまとめになる。

s ああ、なるほど。本当に先生が伝えたいなあとか、子ども達に感じ取ってほしいところはこの真ん中のグループなんですね。だけど、そのための準備だったり、評価のためのまとめだったりって言うようなところですかね？

u はい。

s そういう意味で、「導入とまとめ」のグループと「授業の内容」っていうグループとが分かれてきたっていう感じですかね？

u はい。

s はい、それとですね、ちょっと気になったところとか、お聞かせいただきたいなといったところ、いいですかね？

u はい。

s 「日本芸能・特に民謡への興味をもたせ方が難しい」っていう、日本の音楽についてのことが、授業の内容で先生がきくと伝えたいと思ってらっしゃるんだろうなということに出てきているんですけども、その、ただ、先生のもってらっしゃる準備というか背景として、ヨーロッパとか歴史とかというところなんですよ。この辺のところの兼ね合いというのはどんなふうに感じられますか？

u はい。たぶん自分が頭に入れてきたのが、そのヨーロッパの西洋音楽なので。

s はい。

u でも日本芸能ってちゃんと伝えなきゃいけないって、いわれているし、やらなきゃいけないんだろうなとは思いますが、自分がたぶんどこに興味を持ていいのかわからないから、持たせるのがすごく難しいんでしょうね。

s うーん。

u じゃあ、たとえば、ソーラン節っていったって、ソーラン節のどこに興味をもたせて、そこから何を学ばせて、最終的にはこう、日本芸能っていうとこまでつないで行かなきゃいけないとか、こういう中で日本で歌われてきたんだ、つながれてきたんだってことが、彼らの中にわかって、そのうちの1人でも2人でも、今いないかもしれない、0人かもしれないけど、なんかこう日本をになっていく子ども達を本当は作らなきゃいけないってことを狙いとしていわれているんだろうなってことはわかるんですけど。

s うーん。

u 自分がそっちに行っていないので、すごく難しいんですね今。

s なるほどね。ちょっとですね、直接こちらのデンドログラムに関係するっていうこと

とは違うんですけども、オーケストラが多いので、実際の楽器を見せて音楽を聴かせたいというあたりは、先生の中で基盤になっていることだったりとか、先生が心がけてらっしゃることがあるのかなっていうふうにちょっと思ったんですけど。

u ああ、こっちにももしかしたらつながっちゃうかもしれないんですけど、映像がなくで音だけだと、なんだろうな、想像力って、あんまり、もちろん見たことも聞いたことのないようなものを想像しろって、自分にとっても難しいことなので、民謡とか日本芸能で使われている楽器とかもそうなんですけど、できる限り映像があって、こうやって吹いているんだ、こういう音がするんだとか、実は雅楽の楽器も何個か買ってもらって、「こういうんだよ、ちょっと音出してみたら」とかってやってみたりとか。そうするとやっぱり、入り方が全然違うんですよ、気持ちのこう、聴き方が。曲を聴く耳が艶然変わるんですよ。オーケストラの曲だと、ドンと一気になっちゃって、はい終わりになっちゃうので、それよりは子ども達が「あ、これ何の音だ」って言って、わかると彼らなりにすごく耳をそばだてて曲を聴くんですよ。なので、たとえば吹奏楽の楽器だったら、中学校にもあるんですけど、なかなか弦楽器だったりとか、オーケストラの特別な楽器ってないし。

s そうですよ。

u 弦楽器もコントラバスはあるけど、バイオリンとビオラとチェロとか、オーケストラで使われるそれこそなんだろうな、中学校ではコーラアングレっていわれてみたりファゴットって言われているような、大きい学校さんなら持っているかもしれないんですけど、小さい学校にはそういう高い楽器はないので。でもたとえば今回は・・・。

s ファゴットって高いんですか？

u 高いですよ、買うと。

s うちの大学も音楽科があるものですから。音楽科と美術科が併設されていて、その学生が教職をとるので。私は人文系の学科所属なんですけど、教職の担当なので楽器の学生とも接点があるので。

u ファゴット、オオボエ系は高いんです。ダブルリード系は高いので、なかなかそれは買ってくださいとも言えないし、買ったところで中学校では。

s ダブルリードっていうんですね。

u そうなんです。それも本当は見せてあげたらいいんですけど。

s じゃあ、ここでいっている「できる限り映像をつけたい」というのは、オーケストラとかの演奏している映像をつけたいってことですかね？

u はい。

s じゃ、オペラなんかもですか。

u はい。できる限りは音だけでなく見せるようにしたりですとか、します。えーと、たぶん子ども達によって違うのかもしれないんですけど、今のうちの子たちは音だけ聴いてても想像力が追いつかないので、眠くなっちゃったりとか、「つまんない」で終わっちゃう。目から入る視覚から入る情報は、多少あるとちょっと興味を持つ子が増える。それが果たしてあっているかどうかわからないんですけど。でも、それでも聴いている子は音楽を聴いたり、見てることはオペラとかだとあの人歌ってるとか、あの人

踊ってるとか、わかると、少しでも何かのこればいいかなと、彼らの中に。っていうための、楽器だったりとか、映像だったりとかっていうのがあると、自分としてはありがたいなあ。思ってます。

s ああ。あとですね、ちょっと私ですね先生に回答していただいた内容を見せていただいて、たとえば、「難しい」とか、あと何々したいとかって言うのがすごく出てきたのかなって思うんですね、おそらく、こういうふうにしたいけれども、いろいろ壁があるみたいなのところが、鑑賞にはあるのかなっていうところがちょっと感じたんですけども、どうですかね、その辺先生の中で。

u それは、あるかなって思います。自分のなかで。実際楽器は見せたいんだけど、それは難しいことだし。ここに関しては自分のまあ準備不足なんだろうなって思うんですけども。ポイントをあてる場所っていうのは、私いろんなことをしゃべっちゃうので、しゃべっちゃったり見せちゃったりするので、鑑賞の授業の時に。でも、それをしちゃうと彼らは何を聴いて何を考えればいいのか、わかんなくなってしまうので、いつもそれはだめだと思って、いくつかになるべく絞って聴かせなきゃとおもって、この場合はこれもいいたいしあれもいいたいしって思うけれども、自分の中では我慢してこれだけって、これだけって。で、時間も限られているので、全部ずーっと鑑賞しているわけにもいかないし。子ども達ものってくれるときはすごくのってくれるので、そこで切っちゃうのはかわいそうだなと思う、だからその、のってるからやりたいと思うんですけど、でもそればかりやってるわけにはいけないので。

s そうですね。

u 上手にその時間で終わるポイントをここって決めてやらせなくちゃ、時間配分が足りないかなと。

s あの、印額の鑑賞って難しいだろうなって思うのは、あの、一瞬では終わらないじゃないですか。たとえば、オーケストラはなんとか楽章の第1みたいな、それで5分とか長いものでは10分とかありますよね？そうすると、今先生がおっしゃってたみたいな、どこに絞ってって言うのは個人でも違いますし、当然オーケストラとかだとたくさん楽器が出てきて、ここの部分ではこの楽器、ここの部分ではこの楽器とかって、その辺が難しいとか絞りきれないってことなのかなとちょっと感じたんですけど。

u あ、それもあります。一曲を聴かせようと思ったら、それは無理なので。

s はい。

u そのしたの「曲の聴かせ方」もそうなんですけど、本当は全部聴けばいろいろ子ども達って、いっぱいいろんなことを聴いて考えて、自分で表現したりできるんでしょうけど、もうそうはできないのが現状なので、こちらとしては、ここを、この曲はこのポイントで聴いてもらって、求める感想はこれって作っとかないと、ポイントもあてられないし、聴かせられないし、最後評価もできないので。そういう、すごい切り取った部分だけ。

s そうですね、本来は全楽章で1ストーリーが決まっているものの、その一部のさらに一部をきりとしてっていうのではなかなか伝わらないですね。

u なあなか。でもま、全くやらないよりはましだと思ってやるんですけど、ま、でも、

上の先生方から教わることは、先生方はポイントを絞rinaさいっていう先生もいらっしやれば、聴かせるときはもうじっくり聴かせなきゃだめよっておっしゃる方もいるので、まあ、曲によって。曲によって、長く聴かせるときもあれば、ここだけって聴かせるときもあれば、曲によって頻度は変わります。

s ああ、そうですね。あと、たとえば、合唱だったらば歌うってことだし、アルトリコーダーだったらリコーダーをふくってことだったり、その絞られると思うんですけど、鑑賞、特に音楽の鑑賞って時間としても一定の時間を要しますし、あと、その絞rれないとかっていうこともあると思うんで、特にその先生の中で、音楽故の鑑賞の難しさをみたいなのってどんなところを感じられますか？

u たぶん、1曲がでかい、長い。

s そうですね。作品がやっぱり壮大ですよ。

u 壮大です。で、特に学年があげれば上がるほど、その、まだ1年生とかだと、「魔王」とかって単発で表現もいっぱいあって、すごく聴かせどころがたくさんある。ただ、それを前提として、たとえば「春」もそうだし「モルダウ」もそうなんですけど、それを前提として2年生にあがると、ベートーベンの交響曲5番って、いきなりそうくるとどうするかこれっていう。

s ああ、そうですね。

u で、3年生になるとオペラと歌舞伎。

s ああ。

u だから、ふつうのひとだったら、何だろうな中学校とか小学校で聴かなければ一生聴くことは無いであろう分の音楽を、3年間で聴いてるんだらうな。そう思うと、すごい詰め込んでるなあって。

s なるほどね。やっぱり、一緒にたに美術音楽ってまとめられがちですけど、全然鑑賞に関して違いますよね。

u ああ、ぜんぜん違うだろうなって思います。私美術の鑑賞とかってぜんぜんわからないんで、自分が、まあ、教室にいる子ども達は美術もいって、今日は美術鑑賞って書いてあると、美術の鑑賞って絵を見て感想を書くんだよな、何か君だろうって思ってみたりとか、何を見るんだってとかって。

s そうですね。でもまあ、音楽にしてももちろん文章にうまく表現するのって難しいですよ。

u すごく難しいですね。だから一応、ポイントを絞るためでもないんですけど、今言われている諸要素ってやつ、こういう音色だったとか、調が明るくて何々だったとか、リズムがなんだったとか、単調だったから暗く聞こえたとか、って言うのもポイントに書くといんだよっていって書かせたりするんですけど。でもやっぱり文章表現にっていまいわれて来ちゃったので、文章で表現できないと評価できないっていわれて来ちゃったので、だからこれは困ったなと。

s そうですね。

u 私が美術の鑑賞やったら、かけないだろうなって思って。

s うーん、そうですね。では、最後にですね、1つだけ。先生、今日こういうPAC

K分析という手法にご協力いただいたんですけど、今日実際「鑑賞の授業」っていう題材でやっていただいて、何か全体を通して感じられたこととか、何かご自分で気がついたこととかあったら、お話いただけますか？

u わたし、この分け方（クラスター）が、ああ、なるほどなあって思って見てました。

s 納得？

u 納得。自分で何も考えずに思い付いたことを書いてたので、こうやって分けていただいて、ああーって思っていました。

s それは我々としてもうれしいですね。

u すごくそうかあっておもって。

s なんとなく、先生のなんていうんですかね、下地に、先生だからあくまでも授業っていうんじゃなくて、音楽全体っていうのがあるのかなってすごく思ったんですね。だから授業っていうのと、ご自身のっていうのが両方出てきたところに音楽全体っていうのが、なんていうんですかね、下地にあるっていうのがすごくしたので、私としても、学校の先生となると、どうしても学校の授業が下地になっていて、ご自身のっていうのもう少し消えてしまうことがあるんですよ。

u 自分で鑑賞の授業は嫌いじゃないんです。楽しいので、自分でも曲を聴いてて、自分でもいろんなこと新たに勉強して、勉強できること新たにするとへえーとか思いながら、何せ今まで浅知恵だったので、教材研究をしながら面白いなあって思うと、面白くなって思ったことは子ども達も何人かのってきてくれるので、面白くなって思いながらやっています。ありがとうございます。すごくわかりやすかったです。

s こちらこそありがとうございました。